

# JMMA 会報

No.1/vol.1 no.1

1996年5月31日 発行

## 創刊に当たって

会長 大堀 哲

本学会は、変革の時代の中で、博物館と産業界、関連学会等とネットワークを図りつつ、社会の期待や要請に対応したミュージアム・マネージメントの研究を行い、その成果を人々の生活文化の発展に寄与することを目指して、1995年3月に設立されたものであります。まだ1年余の若い学会ではありますが、去る3月には「ミュージアムがつくる新しい文化」のテーマのもとに第1回の大会が予想を越える会員の参加を得て盛大に開催され、大変嬉しく思っております。会場提供をご快諾のうえ、細部にわたってご配慮いただきました学習院大学、とりわけ香山健一教授には当日ご挨拶を賜り、心から感謝申し上げる次第であります。また、泉眞也先生には、本学会活動のスタートにふさわしい、大変有益なご講演をいただきましたこと、あらためて厚くお礼申し上げたいと思います。

総会では、研究部会の設置などとあわせて今年度の事業計画等が承認され、本格的な活動へと動き出すことになりました。去る5月13日には、各研究部会長をはじめ、積極的に学会活動に力となっていただける部会幹事の方々約20名が事務局において、それぞれの活動プランについて真剣な検討が行われました。その具体的なことはいずれ本会会報に掲載されておりますが、どの部会にも参加可能しております。

さて、多くの会員からの問い合わせがありました会報が、このたびおくればせながら創刊号をお届けすることになりました。今回は、編集委員会の手づくりで、必ずしもご満足いただけるものではないかもしれません。今後、表紙のデザインをはじめ、全体の構成、その他会報の充実を図っていくために、会員皆様からの積極的なアイディア、ご提案をいただければ幸いと思っております。できるだけ多くの会員の方々に、この誌面にご登場いただき、新しい時代に即応するためのミュージアム・マネージメントのあり方についてさまざまな角度から議論するとともに、会員の情報交流を盛んにして参りたいものと念じております。会員皆様の一層のご研鑽をお祈りし、創刊にあたってのご挨拶といたします。

(国立科学博物館教育部長)

## 目 次

創刊に当たって / 大堀 哲	• • •	1
JMMA第1回大会の報告 / 事務局	• • •	2
第1回大会特別講演「ミュージアムがつくる新しい文化」 / 泉 真也	• • •	3
第1回大会に参加して（参加会員の感想）	• • •	11
各研究部会からの報告と今後の予定	• • •	13
事務局からのお知らせ；編集後記	• • •	19

## J M M A 第 1 回大会の報告

学会事務局

去る 3 月 8 日（土）、9 日（日）の両日、学習院大学をメイン会場にして延べ 300 人の会員が参加し、学会設立以来はじめての大会「ミュージアムがつくる新しい文化」が開催された。

総会では、学会の組織の在り方、研究部会の設置、平成 7 年度収支報告、平成 8 年度事業計画予算等が理事会から提案され採択された。

平成 8 年度は、9 月頃を目途に近畿方面でシンposium を開催することと、3 月に総会を開催すること、また、会報として本誌を年 3 回発行するほか、年報や研究紀要を発行することが決定した。

また、ミュージアム文化研究部会、制度問題研究部

会、理論構築研究部会、事業戦略研究部会、ソフトサービス研究部会の 5 つの研究部会が設置され、定期的に活動していくこととなった。それぞれの部会の在り方や進め方についてはその後の研究協議会で議論されたが、そこでは部会長と部会幹事を中心に運営していくこと、研究部会には会員であれば誰でも参加できる自由な形式にしていくことが確認された。

総会に引き続き予定どおり特別講演、研究協議会、懇親会が実施され、9 日（日）は、国立科学博物館、セゾン美術館、三菱みなど未来技術館で見学を含めた協議が行われた。

## 第 1 回大会 特別講演

## 「ミュージアムがつくる新しい文化」

環境プロデューサー 泉 真也

## I. ミュージアムの起源としてのムーセイオン

「ミュージアムがつくる新しい文化」というテーマでお話させていただくことになりますが、このテーマには私なりの思いがございまして、本日は民俗衣装を着てまいりました。

この服は八王子のお嬢さんが織ってくれた布でつくったインドの服です。モンスーン気候に適応できるようにできており、非常に風とおしがよくつくられています。この機能とデザインはまさしくインドの歴史と文化がつくりだしたものです。

今日は大変立派な学会ですので、普通であればダークスーツでネクタイを締めていこうと直前まで迷っていました。しかし、本日はどうしてもムーセイオンのことをお話しようと考え、世界のいろいろな服を着て来ることを決心したわけです。

ミュージアムというのは皆さんご存じのように、ギリシアのムーセイオンという建物からできたことばです。ムーサイの神様、ミューズの神様です。ミューズの神様に仕える若者たちを育てる施設としてギリシア

人が考えたのがムーセイオンです。

ムーセイオンには世界の珍しい工芸品が集まりました。動物もいました。植物もいました。そして魚もいました。今で言いますと、美術館であり、水族館であり、博物館であり、同時に何よりも若者を育てる学校であったわけです。

ギリシアの人たちはそこに見所のある若者を呼び、おまえたちはギリシア人だから「この世界は大きな龜の上に乗っていて、太陽が動いている」と考えているかもしれない。しかし、東の方にあるインドという大きな国の人たちは「この世界は大きな大陸をノッシノッシと歩いていく像の背中に乘っている」と考えている。そういうように、ギリシア以外にも多くの世界があり、それぞれの文化を持ち、それぞれの価値観を持っている。そういうもののうえにたって学術や芸術を取り仕切っていらっしゃるミューズの神様にお仕えするつもりはないかと言って若者たちをけしかけ、「世界とはそういうことですか、私はぜひ勉強したい」と言う若者に教育を行ったのです。

その人たちが今日で言えば僧侶になり、神官になり、

あるいは事務官になりました。「秘書の像」という有名な彫刻があります。当時、秘書というのは非常に偉い存在でした。つい最近まで、字を書ける人というのは非常に貴重な存在だったのです。日本ではこの50年間見ませんけれども、軍人が肩につけている憲章は偉い人ほどたくさん線が入っています。何故かといいますと、昔は肩に鉛筆を差して書いていたのです。偉い人は書くことがたくさんある、たくさん字が書けるというので、たくさん筋の入った憲章をつけていたのです。それほど字を書くことは人間にとって価値あることであったわけです。そういう職業も含めてムーセイオンというものを彼らは考え出したのです。

## II. 博物館とは何か：博物館の定義

### ○博物館と博覧会

博物館と博覧会につきましては、いろいろな説があります。1970年の万博で一緒に仕事をしました堺屋太一氏は「博物館というのは恒久施設で、博覧会は仮設だからまったく別なものだ」と指摘しています。しかし、恒久か仮設かということは別として、モノによって世界に触れ、世界を学ぶという点でいうと、博覧会も博物館も同じ性質をもっているのです。

本日はUCCコーヒー博物館の諸岡先生もいらっしゃります。私が担当しましたトヨタの産業技術博物館は自動車の博物館ではなく、自動車の製造技術の博物館です。当然のこととして、自動車そのものの博物館もあります。

このように我々の文明の総体あらゆるものが博物館で扱われています。そう考えるならば、「博覧会というのは文明の総体を扱う一種の仮設的博物館」であることが見えてくるはずです。

そういう意味でいいと、本日事務局が配布しました極めて怪しげなレジュメ、『文芸春秋』に今年1年連載いたします鉄を素材にした話ですが、これは、私なりに博物学的な視点で鉄というものを見ているつもりでございます。皆さんの参考にお使い下さい。

### ○アメリカの3つの分類

「博物館とは一体何だろうか」「ミュージアムとは一体何だろうか」ということにつきましては日本独自

の解釈があろうかと思います。しかし、私がいろいろな方から伺いますと、どうもアメリカの考えるミュージアムが一つの割合うまくまとまりかなという気がいたします。

アメリカではミュージアムは大きく三つに分けることができます。サイエンス・ミュージアム、アート・ミュージアム、サイエンス・センターと法律で業務が規定されています。サイエンス・ミュージアムというのは、いろいろな遺産を集め、それに対してキュレーターが研究をし、その研究を市民に公開することを義務づけられているところです。

アート・ミュージアムは、名だたる絵画を収集します。そこではレオナルド・ダ・ビンチが使ったフレスコは何故剥げてしまったのかということも調べ、「それはこういう訳であった」ということを市民に対して公開します。

それに対してサイエンス・センターあるいはアート・センターは、最新の技術の実物を使って市民に産業の最先端、あるいは自然科学の最先端を分かりやすく説明するところです。そこでは古いものを集めてそれを研究する義務は負っておりません。このようにセンターという考え方とミュージアムという考え方の二つを総称してミュージアムと言っております。

## III. いま新しい時代がはじまろうとしている

### ○大量消費文明の終焉と日本が失ったもの

私は、博覧会の計画以外にも都市計画に携わっています。その際いつも考えさせられることは、我々は自分と出会う場所であり、神と出会う場所でもあり、世界と出会う場所を戦後あるいは明治以降100年の間に失ってしまったのではないかということです。

我々が失ってしまった象徴的なものは東京の街です。こういう汚い街は世界にもあまりない。特に原宿、渋谷など若者に任せたところがダメです。成熟という感覚が少しもない。

何故こういうふうになってしまったのでしょうか。それは私たちの世界がこの20世紀、特にここ100年間、ある考えに導かれてきたからです。それは簡単に言えばフォード社の創業者であるフォード氏が考えた世界、すなわち「大量生産・大量消費」「大量に質のいいも

のをどんどんつくり、みんなに買ってもらうことで、人間全体が非常にハッピーになる」という世界観です。

「同じものを大量につくれば安くなる、安くなれば皆さんがハッピーになる」というフォーディズムでは、つくられる商品というものは、みんな良きものであったわけです。そこで商品のことをグッズと言うわけです。商品のグッズはここからきています。

フォーディズムは非常に偉大な思想で、最初のフォード氏の手記を読んでおりますと感動します。フォード氏は福祉政策として産業を考えています。人々に夢や幸福を与えるために産業を展開したのです。そういう意味では目の付け所は非常によかったわけです。しかし、それが必ずしも結果として素晴らしい社会を生みださないで、地球全体を生産性あるいはモノをつくる工場にしてしまい、「工場国家」であり、「工場都市」にしてしまったわけです。

確かに貧しい時代はそれで済んでいたのです。しかし豊かになるとそれは資源の浪費になり、うまくいかなくなってしまう。どうしてこういうものを買ってしまったのだろうと思えるものが家の中にも山積みになっているはずです。そこで在庫が増えることになり、生産は停滞せざるおえなくなってしまう。これが景気の停滞の原因といわれています。

最近は「これから新しい世界は東南アジアだ。あそこにすばらしい経済がある」ということになる。それに対しては「お前たちはそういうことを言って、いらなくなったり自動車やコンピューター、すなわち、20世紀のゴミを東南アジアに捨てようとしているだけではないか。ゴミを捨てながら金を取っているのが経済開発である」という非常に痛烈な批判さえも聞こえてきます。

20世紀は、政治も経済も文化もこの考え方でやってきました。ところが、最近その考え方ではどうにもならなくなってきた。経済学では、近代経済学もマルクス経済学もだめになり、今レギュラシオン経済学というものが新たに生まれつつあります。

ではここからどこに向かってもう一度旅立っていくべきなのか。そこに私はこのムーセイオン・ステート「博物館国家」というものがあるのではないかという気がしております。神と出会い、自分と出会い、そして世界と出会うということは、別の言い方で言えば文

化と出会うということです。

### ○求められるのは多様性の尊重

「西洋の思想だけが世界を統一している。それは素晴らしいことだ。」という方がいらっしゃいます。桑原武雄さんや音楽家の三枝さんがそうです。

私は三枝さんにロシア系の人の音楽が好きだと言いましたら、「泉さんのようにふだん知的なことを言っている人がどうしてそういう感情的な感覚的な音楽が好きなのか」と笑われました。彼は、「西洋音楽が世界の音楽になったのは、音楽というものがアートの中で最も芸術的であるから、そのロジックを伴ったものだけが世界共通のものになる」と盛んに強調していました。最近は「あまり理屈ばかり言わずこれから書きたい音楽を書こう」と言っておりますから少し変わってくると思いますけれども。

桑原さんは、「せっかく文化から文明に来たのに、今さらなんや文化、文化とおかしいこと言いおって」ということになります。最近はお目にかかるかもしれません、大阪の万博のときには「泉さんおかしいやないか、せっかく文化、文化と言って世界が勝手なことをしていたのがやっと文明、これは人類の奇跡やで、いろいろな価値をもった人が一つの価値に統合されたというのは人類の奇跡や、なんでもう一回文化に戻らないかんのか」と言っておられました。

そういう点で言いますと、「文化と出会う」ということが、そして世界の人がいろいろな文化を持っていることを知ることが大事だ」という私の考え方は古いと思われるかもしれません。しかし、私の大好きな先生のお一人で、元東京大学、現在は国連大学にいらっしゃる科学史の村上陽一郎先生は、文化は文明をも内包したもっと豊かなものと定義しています。

「文明というのは文化の一つの形であり、たまたまギリシア・ローマという文化が文明的な様相をしていて、その文化が今はやっているにすぎない。だから、人類数十万年の歴史の中でたかだかここ200年ぐらいはやっているもので、これがよくてこれが悪いというようなことは判断できないない」と言っています。

我々はここでもう一度世界にあるいろいろな文化を仲間として、友だちとして自分の身につけ、かつこちらから世界に貢献していくことのできる大きなスタジ

オ、大きな学校、大きなトレーニングとしてのミュージアムというものを考えたいと思います。

#### IV. 21世紀の日本の国家像

##### ～ミュージアム・ステート国家～

20世紀の日本は、世界の産業国家でありエンジン・カントリーを目指して今日の地位を築きあげてきました。その過程で日本が失った一番大きなものはこの“ムーセイオン”的な考え方です。

私は子供の頃はよくミュージアムに行きました。しかし、大人になってからはほとんど行っておりません。ここ数年我が国は政治も産業もだめになりました。環境問題に象徴されるように、21世紀を目前に地球規模でおかしなことになってきました。もう一回地球というものを立て直していくために世界の人々が協力していく必要があります。

この時代に必要なのは世界というものを素直に見つめることではないでしょうか。そして、自分たちの住む世界とは違う世界があり、そこに人々が暮らしていることを発見し、お互いが協力して一緒に生きていることを再確認することのはずです。ミュージアムというのはもともとそういうものであったのです。

古来から日本は海外の文化をみごとに吸収してきました。インド、中国、オランダ、イギリスなど当時の先進国から多くのことを学び日本的にアレンジして今日の文化をつくりあげてきたのです。そのことが日本は東洋文明の終着駅であると同時に西洋文明の終着駅でもあるといわれる理由でもあります。日本人は戦後50年の間に、物質的繁栄にのみ関心があったため肝心なことを忘れてしまったのです。

もういちど日本の原点にかえって考えてみようではないでしょうか。そうすれば、21世紀の日本が目指すべきはミュージアム・ステートミュージアム国家、すなわちムーセイオン・カントリーであることがみえてくるはずです。

#### V. ミュージアム・ステートの実像

##### ○博物館のパラダイム

##### ～新しいコンセプトはモノから心～

ミュージアムというとどうしても箱物を考えがちです。もちろん箱物は必要です。しかし先ほど言いましたようなミュージアム・サイト、博物館国家というものを考えるときの一番ベースには、やはり博物館という考え方にあると思います。これがしっかりしていないとものはできない。

たとえば歴史の博物館、美術館、産業技術博物館など様々なタイプのミュージアムが都市の中にはあります。そういう都市がいくつもできていきますと、博物館都市というものになります。これは必ずしも大きい必要はありません。

この博物館都市が、例えば岩手のこのあたりは平泉の文化がある、遺跡があるととらえてみると、これはもしかすると大きな意味で博物館かもしれない。こういうものが大きくなっていますと、先ほど言いましたような博物館国家になります。

これは先ほど申し上げましたのように、たくさんモノをつくる人が偉い人、たくさんモノをつくる会社が大会社という考え方ではありません。より豊かな文化、より豊かな人間生活というものをクリエイトする人が偉大な人であり、偉大な都市であり、偉大な会社であり、偉大な国家であるのです。

我々のコンセプトをモノから心に移し替えていく、これから日本全体を組み替えていく。今日は詳しく申し上げる時間がありませんが、私が今お手伝いしている国土省、建設省、運輸省、自治省、すべてこういう方向に動いています。

役所が考へてきた20世紀型都市は工場を中心としたまちづくりがありました。そこには大都市があって、近くに労働者がいて、労働者は大工場をつくる。流通の足が短いから、大都市、大工場、大公害という図式でやってきたわけです。これはだめだということに今全員が気づきはじめています。国土庁にしても通産省にしても、プロジェクトの単位を小さくしようとしています。

私が一番力を入れているファッションタウン化構想推進協議会では、今までのよう産業が物をつくる、都市をつくるという考え方ではありません。都市、ライフスタイルが産業を生むと180度転換しています。

##### ○北イタリアに学ぶ

そういう街がすでにあります。北イタリアがそうです。美術と一緒に北イタリアの産業というものをつぶさに研究していただければ、私の申し上げていることが決してデタラメでないことがわかっているだけだと思います。この傾向は今日日本の中央官庁で起こりつつあります。もうひと頑張りすれば、私が申し上げるようにファクトリー・ステイトからミュージアム・ステイトへのとっかかりはもうそこに来ております。私はミュージアムがつくる新しい文化というものはそういうものだと考えております。

もちろん個々のミュージアムの運営、そこにどういうふうな運営をし、どういう展示をし、どういうふうにそれをみんなに発表していくかということは日常の業務としてあります。しかし、ぜひ皆さんのが肩を組んで全国各地からいっせいに声を上げていただきたいのは、ものづくりで国をつくるのではなく、心づくりというのはいやな言葉ですが、ミュージアムというものによって、日本全体が大きなミュージアムになろう、世界の若者たちが日本に集まってきて、世界というのはこんなにすばらしいものだということを日本から学び、そして世界に向かって旅立っていく、日本が世界のムーセイオンになりたいということを私は考えておりまして、そういうことが実はミュージアムがつくる新しい文化だろうと思っております。

産業論や経済学、あるいは道路交通網などいたるところでそのトレンドが生まれつつあり、ここ数年の間にすべてがそういう方向に動き出しています。今日はそういう傾向が生まれていますよということだけ申し上げておき、我々は幸いにして生きているうちにそういう時代にたどり着いたことを、皆さんと一緒に喜びたいと思います。

## VI. ミュージアム・ステートに必要な博物学のまなざし

ミュージアムステートの一つのパターンとしてどういうものがあるか。例えば博物館として、あるいは博物都市としてどういうものがあるか。いくつか具体的に考えてみましょう。

### ○つくば博のコンセプト

#### ～世界はどうなっているかという問い合わせ～

1985年の科学技術博覧会の基本理念は私が書きました。300ヘクタールのところに直径1.2キロの地球の10万分の1のモデルをつくりました。これを四つに分け真ん中に人間の広場、そして4つをそれぞれ空の科学、水の科学、土の科学、火の科学に分けました。

空の科学というのは、風の科学、あるいはもう少し物理学的に空気の科学と言ってもいいと思います。最も芸術的な部分にはオーケストラが入り、最もハイテクな部分にはロケットや航空機が入りました。ロケットは必ずしも空気とは関係ありません。しかし、航空機というのは明らかに空気を制御する技術ですから、航空機とオーケストラを同じまなざしで見ていく、そういう新しい技術のまなざしを風の科学で展開したわけです。

火はエネルギーです。火と土というと陶芸があります。陶芸というと割合に皆さん軽視しがちですが、日本の文化を弥生式、縄文式と分けるのは陶芸です。実は陶芸というのは、人間が自然の中でモノをつくっていく、非常に原始的な初見的な技術で、しかもこれは実際にやりになりますとわかりますが、環境と非常に密接にかかわっている技術です。この話を展開したわけです。

次に「日本の風土」を素材にしました。

日本には海があり、平らなところがあり、里山があり、高い山があります。そこには人が住んでいる。鎮守の森があり、この鎮守の森は山からくる怖いものを防いでくれます。そしていわゆる中山間地帯がある。海は海幸、山は山幸そこを風が吹き抜けていく。時に優しくまた厳しい大自然の恩恵を受けながら、そしてそれとたたかいながら人々が生きている。こうした日本列島のもつてある一つの生活圏を私はある意味では博物圏だと考えております。

科学万博で私がみずからプロデュースしました日本政府出展の歴史館は、稲と鉄という二つのコンセプトから日本の産業技術を歴史的に解明しております。稲は育てる技術、今で言うとバイオの技術です。鉄はつくる技術、インダストリーの技術です。

こういうかたちで個々のパビリオンから全体の構成まで考えておりました。ここでは世界はどうなってい

るかということをいろいろななかたちで皆さんと一緒に体験しつつ学ぶことができる。これは大きなムーセイオンだ。

私はこれはかなりいいモデルだと思ってパリにもっていきましたら評判がよく、では日本でもやろうということになりました。しかし、ある大変偉い人が、まあこれもいいけれども、ヒポクラテスと同じだな、とサラッと言われ、2000年来進歩がなかったのか、と大変残念に思いました。2000年来変わらぬ真理かもしれないと思い直し、今でもよくこういうモデルでものを考えます。

これからこういうものをやってみてはどうか こちらは非常に長い時間、たとえば最低70年、できれば数百年の時間が流れが必要ですが、風は瞬間、瞬間に変わります。こういうなかたちで日本の私たちの生活圏を、アートで、芸術で、産業で、技術で、サイエンスで見直してみてはどうでしょうか。

博物館というのはこういうまなざしでものを見ていくものだと私は考えております。もちろんすべてがこういうふうにはまいりません。非常に専門的な、水の特殊な部分、火の特殊な部分、原子力しかやらないというものもあり、空にしても、音楽しかやらない、航空機しかやらないというものがあるにしてもこういう一つの大きな我々が生きている世界に対する全体的なまなざしをちらながら何かやっていくことが博物館というものの考え方ではないのか、という気がしております。

### ○決め手となるDNAの発見と学際思考

私がミュージアム・ステートの旗揚げを2003年にやりたいと考えていますのは、ワトソン&クリックがDNAの構造を解明したのが1953年だからです。そこから50年たったときに、日本からミュージアム・ステート構想を世界に発信できないだろうかということです。それまでは皆様方と勉強していきたい。

この50年間、私たちに一番大きな影響を与えた思想は、リチャード・ドーキンスというオックスフォードの先生が言い出しました「エゴイティックジーン」、「利己的な遺伝子」という考え方です。

今日の人間は今から20万年前にアフリカを走っていたルーシーという女性の子孫であることが、DNAに

よってわかりました。ドーキンスは、30億年たっても最初の生命のメッセージがいまだに受け継がれていることを、DNAメッセージは実はデジタル・メッセージであるという仮説から導きだしています。デジタルメッセージが注目されているのは、何も生命科学の分野だけに限ったことではありません。産業のことを考えますと、最近の新しい産業、いわゆるハイテク産業という分野では、いろいろななかたちでデジタル・テクノロジーをベースにしてきました。

「DNAはデジタルメッセージである」ということだけで、物から生命までいろいろなことを発見することができるわけです。こういうことを伝えるのが本当のミュージアムであると思います。いま我々はやっとその端緒をつかんだのです。そういう時期に我々が出会ったことは非常に貴重な生きている喜びですから、ぜひこれを日本の国の中にミュージアム・ステートというかたちで組み立てていきたい。

まだ5年あります。そしてそれを2003年に世界に対して発信していきたい。

### ○仮説博物館構想

こういうトータル・イメージとは別に、今私たちが持っていない博物館として、仮説の博物館を皆さんに御検討いただきたい。

「科学というのは間違いのないことの集まりだ」などという考え方はとんでもない誤りです。科学は仮説により進歩しています。文部省検定済の教科書に出ていていることでも、もう100年もすればほとんど間違いになることでしょう。皆さんご存じのように、今の科学技術の中で50年後、100年後も正しいと思われるには熱力学の第2法則しかないというのが世間の一一致した意見になっています。

### 地球は三角錐？

あらゆるデベロップメントは仮説によってひき起こされます。私が十代の頃に先生から聞いて、いまだに心ときめく仮説があります。ご存じかもしれません、地球は何故今のような形になったか、という仮説です。

その仮説によりますと「地球の中には大きな三角錐が入っている」といわれています。何故三角錐か。これは皆さんご承知のように、体積のわりには一番表面

積が大きい形ですから、地球が冷えていくときにまず表面がかたまり、中がかたまるにつれて体積が減っていったのです。したがって地球というのは、体積のわりには一番表面積の大きい形になったのです。地球は本当は三角錐です。丸いところが海です。そしてこの三つの尖ったところ、そこがアジアであり、アメリカであり、ヨーロッパであり、南極であり、北極であるわけです。北極には大陸がなく、何故南極にだけ大陸があるかということがこの構造からよくわかります。

これは全くのウソですが、実に魅力的な考え方です。私はものを考えるときはいつもこの仮説を思い浮かべます。ウェーゲナーは、大陸移動説を出してみんなにあざ笑われました。しかし現在では大陸移動説はまず間違いません。こういうものを大胆に紹介していただきたい。これは間違いかかもしれない、しかしこういう考え方があるのですよということを大胆に展開してくれる博物館はないものかという気がします。

### ピラミッドは蜃気楼でできた？

「何故ピラミッドの中には逆向きの階段がついており、しかも船まであるのか」このことは長年の間の謎でした。これを解明したのがドイツの学者です。

ピラミッドというのは、どういうわけかナイル川の一方にしか存在しないのです。ある状況になりますと、水蒸気が立ち込めてここで光の屈折が起こり、簡単に言うと蜃気楼が出る。その蜃気楼の出方をシミュレーションしていくと階段が蜃気楼の中で有効に生きてくる。実に魅力的ではありませんか。知的な喜びはこういうところにあるのだろうと思います。

この蜃気楼説はその後もずいぶんいろいろとおもしろいことを言っております。我々が南米アマゾンで見る宇宙絵と言われている大きな模様も蜃気楼説で解明できるようです。

今、宇宙絵が描いてあるところにちょうど逃げ水が出ます。逃げ水というのは、ご存じのように地表でどのように光線が曲がり、これがここにあるように見える現象です。この逃げ水のパターンを描いていくと宇宙絵のパターンになるというわけです。

ヨーロッパにはずいぶんたくさんの中石器時代の巨大文化遺跡があります。この巨大文化遺跡の中で1カ所だけ横に長い石が使ってありますが、これもまた

蜃気楼説で解くことができます。蜃気楼が出る時期は決まっているのですが、ここに長い石がありますが、蜃気楼が出るとずっと向こうに沈んだ太陽があたかも移動していくように見えます。そのときの蜃気楼の太陽が入り、出る印がこの巨石であり、太陽の軌跡が横長の石であるのです。

すべてがあまりにもうまいので、たぶんどこか間違っているのだと思いますけれども、こういう話は知っていても何の役にも立たないけれども、本来人間というのはこういうことに対してわくわくするはずなのです。そういうわくわくする博物館をぜひつくっていただきたい。仮説の博物館はとてもいいと、私は思っています。

### イルカと球形船首

「イルカは何故あんなに早く泳げるのか。」筋肉の馬力だけでは、イルカのような流体はそれほど高速に動くことができるはずがない。その秘密は皮膚にあると言われています。イルカの皮膚は細かい凹凸をしており、そのために渦ができることで、エネルギーが外界へ伝わるのを防いでいると言われています。これをパターンに取り、アメリカ海軍が潜水艦に張って実験したら潜水艦の速度が上がったといいいます。本当かウソかわかりませんけれども、そういう説があります。

この仮説を大規模に発展させたのが例の球形船首です。球形をした船が早く走ることができるとは誰にも想像できませんでした。これを開発したのが日本です。波は船が動くことによって発生するわけですから、その分が無駄なエネルギーになるわけです。この波を消せばいいではないかということになり、そこでちょうど逆位相の波が出るような球形の船をつくったわけです。それが今世界を風靡している球形船首です。

### ○素朴な疑問にこたえられる博物館を

#### 自然学校の重要性

実は今、自然学校というプロジェクトが動き出しております。これについては産業界も非常に関心を示しており、応援しています。経団連でもCCCジャパンというのをやっています。私はそこの部会長をしています。

そういうわけで昨日もC.W.・ニコルさんと話すことになりました。「素晴らしい自然の中にはばらしい人間がいれば施設は一切いらない。それだけで十分自然と人間の関係が説明できる」と彼は主張しています。

彼は黒姫に住んで青少年のために自然学校を行っています。彼らを山に連れていくて、木を切って雪の上でたき火をしようということになったそうです。何を燃やすかということで、子どもたちは途方に暮れてしまいます。そこで、ニコルさんは「そのへんにスギ系統の木があるでしょう、大きくなれば下の枯れているところは手で折っても森にはダメージを与えません、まずそれを折ってきなさい。」と教えます。すると子どもたちは「どうやって火をつけますか、マッチはほとんどありません。」また途方にくれてしまいます。「ダケカンバとシラカバは皮の方に油成分が溜まるので、それを少し剥いでいらっしゃい、一握りのダケカンバと一握りのシラカバがあれば、マッチ1本でどんな大きな火もつけられます。」と言って生徒を出してやります。しかし、子どもたちは、50メートルぐらい先にダケカンバ、80メートルぐらい先にシラカバがあるので、みんなどこかへ行って帰ってこない。ダケカンバ、シラカバという言葉は知っているのですが、本当の木がどの木か知らないのです。

ニコルさんの学校を簡単に言えば、世界中どこへ行ってもナイフ1本あれば生きていける人間をつくる学校です。その学校で最初に就職先が決まったのはテレビ局だそうです。テレビ局でドキュメントの撮影に行くときに、そういう人を1人つけておけばまず死なないで帰ってくるだろう、カップラーメンがなくなると元気が出なくなってしまうようなドキュメントの撮影班はだめだそうです。私が言いたいのは、文化に対して、技術に対してそういう人間をつくる、それが実は私の言うムーセイオンだという気がしています。

自然学校は立派な施設ではなく、チョークと黒板さえあれば本当のブラックでいいのです。そこで彼のように自然を語れる人が、例えば日本全国に50万人いてくだされば、どれくらい日本の子供たちが豊かになることでしょうか。

そこではカリキュラムなど必要ありません。私は芸術系の大学というきわめてインチキな大学にいます

でこういう話を平気でやってしまいます。「これもまたアートである」と言えば何を言っても通用してしまうのです。

### 沖縄の水族館での体験

外国人の話ばかりでは悔しいので、日本人の話をしたいと思います。杉浦さんという、元上野動物園のお魚博士がいます。私の大の仲良しで、一緒に沖縄の世界一の水族館をつくった方です。

東京の動物園では夏になると必ず学生を集めて講習をやりますが、そのときに天才的な子供がきたそうです。とにかく魚に対する知識は杉浦さんより詳しく、パッと見ると、これは何とか種、何とか貝、何とか鯛とすぐに言ったそうです。

杉浦さんは感動して、ちょっといらっしゃい、と飼育水槽に連れて行って魚をもたせようすると、怖がってもたないそうです。生まれてこのかたもったことがなかったのです。無理やり手に乗せるとギャーッと言っていたそうですが、ギヤー、ギヤー言っているうちに慣れて、帰る頃にはちゃんと本当の魚を手に乗せながら見る子供になったそうです。

### NHKの日本人の質問を参考にしよう

モンシロチョウは緑の野原を飛んでいます。クロアゲハは、アカシアのような木の木陰を飛んでいます。何故か。これは日高敏隆先生が非常に明快な答えを出しているいらっしゃいます。

モンシロチョウは白いので太陽の光が上がっても体温が上がりませんが、クロアゲハは黒いので太陽が当たるとたちまち体温が上がってまうのです。ごらんのようにチョウチョウは紙のような構造ですから、体温が上がるとあっと言う間に全身の生理機能が失われるのです。したがって、木陰を飛ぶチョウチョウは黒くても大丈夫ですが、陽の下を飛ぶためにはチョウチョウは白くなければいけないです。

この話を続けますと最後に大変おもしろい話に至りますが、そういうように、なんでもいいのです。何だろう、と思ったことから世界の不思議というものを聞いてくださる人が50万人もいてくだされば、建物などほとんどいらないのではないか。大胆な言い方をすれば、そういう感じがしております。

どうも今の博物館というのは、こういうわくわくするようなものになっていない。

みんな図鑑のような決まりきった博物館になってしまった。「日本人の質問」というNHKの大変素晴らしい番組があります。みんなが不思議に思っていることに実際に興味深く応えてくれている。これから博物館はあの番組に見習わなければならない。

世界というものがわくわくするように見えてくる場所、そういう文化、それがミュージアム文化です。一番最初に、ミュージアムというのはムーセイオンですよ、と申し上げたことがそこに帰ってくるわけですが。

特に最近はバーチャルリアリティやインターネットなど、あまり役に立たないものが大流行しそうなので余計に心配です。これから博物館は図鑑的なものからフィールドワークのようなものにならなければならぬ。そしてそういう積み重ねが博物館になり、博物国家になり、ミュージアム・ステートにならなければならぬ。

### ○感動的知識が人をひきつける

#### ～富士通の立体ドーム映像～

これは名誉でもなんでもありませんが、30年間博覧会をやっておりまして、一番人気があったのは、1985年のつくば万博での富士通のパビリオンです。7時間以上の長蛇の列ができました。世界で初めてのフル・コンピューターを使い、DNAの話を展開しましたが、見た人のほとんどが感動しました。

あるお坊さんは後で私のところへ来られて「泉さん、

これは宗教の感動に勝るとも劣らない感動です」とおっしゃいました。当時はまだモノクロームですが、3カ国の共同開発で、ハードとコンピューターは日本が、全体の三次元でドームを使って立体的にものを見せようということを考えたのは、カナダのNFBという国立の研究機関が開発しました。

何故そういうことを考えたか。世界中の学校に小さなドームをつくりたい、もしそこで立体的な映像を全員が見られるようになれば、立体的な話は非常に簡単になる、ぜひ世界中の子供たちにほしい、それは2メートルぐらいでいいのです。2メートルのドームでも50メートルのドームでも同じ効果が出ます。ドームというのはそういうもので、小さくても大きくても基本的な性質は変わりません。ここに出てきた映像は、目から見ますと、ここにあろうがこちらにあろうが、理解度はまったく同じです。そういう平面のフィルムが曲面に写されてもなおかつ平面にあるがごとく見えるコンピューターの方程式、コンピューター・アルゴリズムというのは、アメリカのカリフォルニアの研究所の開発です。ソフトは日本人、電通さんの開発です。

あとで富士通の社長さんとお話ししたら、「あれは二つづくればよかった。見る人の立場を考えれば同じものを二つづくるべきだった」としみじみおっしゃっていました。

こういう世界は非常に面白い。同時に今申し上げましたように、お坊さんも感動する宗教的な興奮があるのです。そういうものをぜひ博物館でやってもらいたい。

(文責:事務局)

### 第1回大会に参加して～参加会員の感想～

#### 泉眞也氏の特別講演について

##### (国立科学博物館 塚原正彦)

今回の講演で泉氏は、21世紀の新しい日本人の生き方、産業立国にかわる魅力的な国際戦略としてミュージアム・ステート構想を提唱する。

21世紀の新しい文明に対応するためには、ミュージアムが時代をリードしなければならない。そのためにはミュージアムは「世界にあるいろいろな文化を仲間として、友だちとして自分の身につけ、かつこちらから

世界に貢献していくことのできるスタジオ、学校、トレーニングセンターになるべき」で、「日本全体が大きなミュージアムになり、世界の若者たちが日本に集まってきて、世界というものはこんなに素晴らしいものだということを日本から学び、そして世界に向かって旅立っていく、日本が世界のムーセイオン」になるべきだと提案している。

文明の転換期に直面しあらゆる価値観が変動にさら

されている現在、これまでの成功体験を棄却して、「何のために存在するのか」というドメインの問いかけが重要であることが経営学で指摘されるようになってきている。これから企業（ミュージアムを含める）の命運を握るのは、このドメインであり、そのためには「存在領域を見直し」「あらゆる事業について成功体験から決別」し、「何のために」という素朴な問いかけをすることは欠かせない。

戦後間もなくプラグやソケットの開発で利益をあげた松下電器は、その成功におぼれることなく、常に「何のために」という問いかけを続けながら新規事業にチャレンジすることで世界最大の総合エレクトロニクスメーカーに飛躍することが出来たのである。ミュージアムもこうした成功に学びながら新たなドメインをつくりあげることが求められているのである。

ではドメインはどのように規定していくべきなのであるのだろうか？その意味で、博物館関係者がこの講演から学ぶべき点は非常に多いと思われる。

第一学ぶべき点は、制約要因や成功体験にとらわれないで、新しいものを創造し、時代をかえていくという積極姿勢である。

ミュージアムの議論になると、「ミュージアムに対する社会の評価が低い」「予算が不足している」などというあきらめムードや社会改革待望論になってしまふが、本論はそれらのあきらめムードや社会改革論から決別している。DNAの発見や大量消費文化の終焉をその文明史的意義を具体的に考察しながら、ギリシアのムーセイオンの時代にまでさかのぼって「ミュージアムが時代をリードしなければならない」と大胆に指摘している。そこには泉氏の人間に対する愛情と未来に対する楽観的な姿勢が貫かれている。

ところで、最近ミュージアムマーケティングが注目を集めているが、それは、これまでの枠組みにとらわれた市場調査に終始すべきでない。本論で指摘されている大胆な発想と未来の対する楽観的姿勢をとりいれていくことを検討いただきたい。

第二に学ぶべき点は、ドメインは、荒唐無稽なものであってはならないということである。それには現実性とバランス感覚が不可欠である。

そこで、泉氏は芸術と産業が融合した北イタリアのまちづくりの成功から、ミュージアムステートはすで

に実現されつつあることを念頭においている。それと同時に「日本文化は東洋文明の終着駅であると同時に西洋文明の終着駅である」という我が国のこれまでの歴史的文化的蓄積を見逃さない。そこでは、「もう一度日本の原点にかえってミュージアムを見直そう」という視点を持ち続けている。

そういう現実性とバランス感覚にたっているからこそ、「葉っぱ一枚からすべての文化と科学が説明できる博物館」「仮説博物館」「素朴な疑問にこたえられる博物館」などの刺激的な発想の転換も可能になるし、説得力がある。

それ以外にも、あらゆる領域で「何のために」という素朴な問いかけが重要なことであり、そのためにはどういう視点をもつべきか、この講義で展開される具体例から我々は今まで気づかなかった多くのものを教えられる。

## J MMA第1回大会に参加して

(北海道立北方民族博物館 佐々木亨)

ミュージアムの現場において、いつも痛切に感じることが2つあります。1つは広い意味での利用者とのコミュニケーションという視点がなぜ軽視されているかということ。もう1つは、日本におけるミュージアムの使命は、いったい何なのかということです。この2つは、日本のミュージアムの抱えている大きな課題であり、また相互に密接に関連していることだと考えています。

第1回大会では、5つの研究協議が行われました。「事業戦略研究」、「ソフト・サービス研究」など、利用者とのコミュニケーションに関する部会。ミュージアムを取りまく「制度」や「文化」を通して、社会におけるミュージアムの位置づけ、存在意義を考える部会。さらに、わたしも参加しました学際的視点からミュージアム・マネジメントの理論構築を検討する部会など、今日のミュージアムの課題と照らし合わせると、とても的確なテーマ設定がされていると感じました。

しかしこのような研究部会は、最初の意欲をいつまでも継続してこそ、良質なアウトプットが生まれてくると思います。また、「利用者のための研究」から、途中で「研究のための研究」にならぬよう、この学会

の拠り所を常に見つめながら、学会を育てることにわずかながらでも協力していきたいと思っています。

### 研究協議に参加して (宮城県教育庁 佐藤琴)

今回の事業戦略研究部会では第1回ということで、会員同士の自己紹介も兼ね、現在博物館の運営にたずさわっている方々からそれぞれ館の現状について説明していただくことが中心となった。その内容は、それぞれの館の特徴的な展示手法はどんなものか、どのような来館者サービスを行っているか、集客についてどのような工夫をおこなっているか、などであった。

これらの報告を聞き、まず実感したことは非常に単純なことなのだが、博物館と一言で括ってはいるが、その実状は一つ一つの館によって全く異なっているということである。取り扱うテーマも、設立主体も、活動方針も、立地条件も、それぞれの館が独自の事情を抱えている。したがって、この場で発表されたそれぞれの方法は、あくまでもその館の方法でしかなく、応用が効かないものである。しかし、その一方で、それぞれの博物館が現在抱えている問題は同一のものであるという認識も持った。それは、与えられた状況の中で、博物館が目的とするメッセージの発信と、来館者の欲求をどのように共存させていくかということである。需要と供給のバランス、まさしくこれが我々を目指すべきマネージメントであろう。ただ、博物館の場合、問題をより複雑にしているのは、そこで交換されるものが入館者数では計量不可能な無形のメッセージと来館者の満足であるということだ。

このような状況を踏まえつつ、本研究部会では博物館における事業戦略の在り方について模索していくわけだが、検証すべき項目は多岐にわたっており、おそらく一つの理論として取りまとめることは非常に時間がかかると思われる。しかし、この目標を見据えつつ博物館に係わる様々な立場の人間が交流することによって、博物館そのものに対する我々の認識をより成熟させていくことへつながっていく。現在我々にとって必要なことはすぐに効く特効薬を作ることよりも、博物館を取り巻くものたちの、ゆるやかな体質改善ではないだろうか。

### 大会に参加して (東京大学文学部 篠崎明子)

初めて学会と名の付くものに参加し、やや不安を感じつつ大会に出席した。想像以上に参加者が多く、驚いた。会場を見まわして気付いたのは、その大半が壮年男性で占められていたことだ。世間知らずの学生の身としては、社会を動かしているのが壮年男性だという現実を端的に表しているような気がした。私の周囲で、ミュージアム・マネジメントや博物館学に興味をもつのは女性の方が多い。学会としては、もっと様々な立場の人々、特に女性へのアプローチが必要だと思う。

大会では、泉氏の講演の後、制度問題研究会、2日目にはセゾン美術館見学に参加した。それぞれとても興味深く、新たな視野を開くことができた。しかし、全体を通して感じたのは、参加者それが、はっきりと問題意識をもち熱意をもって取り組もうとしているが、多種多様なバックグラウンドをもつ人々が集まっているために、互いの問題意識の具体的な内容に迫れなかった、ということである。第1回ということでやむを得ない点はあるが、このままでは、議論の焦点がぼやけたままになってしまうだろう。この新しい学会のバラエティの豊かさを死なせることなく、これからの議論の土壌となる共通認識をつくることが最初の課題だと思う。

## 各研究部会からの報告と今後の予定

### ミュージアム文化研究部会

部会長：沖吉和祐

#### 第1回大会研究協議の報告

ミュージアム文化研究部会は、参加者が多かったため、A・Bの2部会に分かれて開催された。部会長は沖吉和祐氏であるが、今回に限りA部会は土井利彦氏を、B部会は里見親幸氏を仮の座長として、研究協議が進められた。

A部会では、はじめに出席者全員が、現在の活動及び博物館に関する関心事、それと簡単な自己紹介を行った。その中では、小、中、高校教員で、現在学校に博物館を建設していくこうとしている会員や大学のキャンパスを全てミュージアム化しようとしている会員の、具体的な活動が報告された。

その後は自由に討議が進められた。本年秋に新設される「琵琶湖博物館（仮称）」の学芸員、嘉田由紀子氏によって博物館開設に至るまでの具体的な活動や留意点、行政と博物館の間の問題点が語られたり、目黒実氏により「チルドレンズ・ミュージアム」建設の際のことが語られるなど、非常に具体的な問題を取り扱う有意義な討議となった。

また、「博物館協会との関わり合い」や、「博物館のソフトに対する資金援助の可能性」、「文化施設は文部省や教育委員会などと切り離した形で存在できるか」といったことなどが語られ、博物館に関する問題の多さを改めて実感できる良い機会になったのではないだろうか。

最後に、本部会の今後のテーマの設定について、ほかの部会が取り扱う問題と重ならないよう慎重に行っていくことを確認して終了した。

#### 今後の予定

##### 〈研究の趣旨〉

科学技術の進歩、情報化・国際化そして高齢化が進む現代社会での新たな博物館の役割を、「文化」の視点から追求する。

上記のような状況の正しい理解、自然・伝統の保護、地域化の重要性が指摘されるなかで、博物館は何ができるか、何をすべきか。新しい博物館像は。

##### 〈今年度のテーマ〉

地域文化の発信、企業文化の創造への博物館の貢献（役割）と博物館自身の「文化」

##### 〈研究協議の方法〉

今年度は、各博物館における具体的な実践例（理念、過程、対象資源（資料）、人材、展示・普及の視点）をもとに、自由な協議をとおして、その評価と今後の可能性を探る。

##### 〈研究会の開催スケジュール〉

第1回 7月7日（日）午後2時～5時

会場：国立科学博物館

第2回は、9月に開催。

以後、2ヶ月に1回程度開催。

適宜、グループによる小委員会を開催。

##### ○ 実践例をご紹介いただける方は、ご連絡下さい。

沖吉和祐（静岡大学 054-238-4401）

### 制度問題研究部会

#### 第1回大会研究協議の報告

制度問題研究部会は、学会理事の島津晴久氏を座長として、学生会員2名を含む13名が参加して開催され

た。それぞれがそれぞれの関心と問題意識をもってその場に臨んだことは当然のことではあるが、なかに共通する問題点も見られたことは言うまでもない。

はじめに出席者全員が、関心をもつ事柄などについて述べながら自己紹介をし、その後自由に語り合う、という形で会は進められたが、筆者の手もとのメモをもとにそのとき述べられたことをいくつか紹介してみよう。

- ・博物館というものを考えるうえで一定の枠というか博物館とはこういうものだという「土俵を決める」必要がある。
- ・どんな施設や機関にせよ、制度はそのものの根幹にかかるるもので大切な意味をもつ。
- ・制度改革に関わったなかで現行の法律のもとにおける改革には限界のあることを痛感した。
- ・文化施設としての博物館をとらえるとき、側面からサポートする役割はどんなものだろうか。
- ・博物館法をよそに置いた博物館の存在することはどういうことなのだろうか。
- ・博物館もどきと博物館とを分ける必要がある。
- ・博物館に限らず、学習の場として見ていくうえで教育行政との関わりを考えていきたい。

このようにほとんどの方が博物館法にかかる問題を意識されていたようであった。これらの発言を受けて座長の島津氏が、最終的には博物館法の改正が考えられなければならないだろうと述べられ、部会長に島津氏、幹事に鷹野をあてることとして閉会した。

(幹事：鷹野光行)

#### 制度問題研究部会の今後の予定

制度問題研究部会の今後の予定や具体的な検討課題などについて話し合う会が5月13日に国立科学博物館において開かれた。部会での検討事項は、以下の3点を軸としていくこととした。

1. 博物館の制度の現状を把握してその中にある問題点をあきらかにすること。

2. いろいろな方向からその問題点の解決の方策を考えること。

3. 問題点を克服した博物館制度の理想形を設定すること。

様々な検討・研究はこの順に進められるのであろうが、具体的な内容として、現状を把握するなかでは日本の制度だけでなく、欧米各国の制度なども調査したり、または海外事情に詳しい関係者を招いて話を聞くといった試み、また博物館法によらない多くの博物館施設（類似施設）の存在も当然無視できないものであるので検討課題としていこう、という提案があった。そして最終的には新博物館法試案を作成することも目指して活発な議論をしていこうということも確認された。

当面の予定として、今年度の第一回目の研究部会を6月29日（土）に以下のような内容で開くこととし、第二回目の研究部会は10月中旬に、第三回目の研究部会は来年3月の学会の総会にあわせて開くこととなつたが、来年度からは部会は年に4回とすることも話し合われた。

（幹事：鷹野光行）

#### 第1回 制度問題研究部会

日時：6月29日（土）午後1時～5時

会場：国立科学博物館

テーマ：生涯学習審議会社会教育分科会計画部会  
学芸員専門委員会においての報告ができるまでの検討状況について

報告者：鷹野光行

#### 理論構築研究部会

#### 第1回大会研究協議の報告

名称から想像する味気なさにもかかわらず、10名の方のご参加をいただき熱心に御討議していただいた。初めての会合なので、自己紹介をかねてこの学会に対する期待や要望も併せて述べてもらった。事務局としては、組織論、意思決定システム、リーダーシップ、事業企画の手法、経営評価法、財務戦略、ネット

ワークや経営多角化等の問題をテーマとして準備していたが、参加者の意識は多種多様で、博物館の運営についてのさまざまな意見を持つ学会員がいることが分かった。ミュージアム・マネジメントの理論構築といっても、企業等の経営学の焼き直しではなく行かないであろうことが感じられた研究会であった。

具体的には、日本における博物館の設立過程に関する

る問題点を指摘する意見が多く、とりわけ公立博物館の建設過程での諸問題点が開館後に顕在化し、その結果として博物館経営のビジョンの欠如が問題として生じるのではないかとの意見もあった。また、ミュージアム・マネージメントに関しても、博物館の社会的使命を見通したマーケッティングが必要であり、ニーズだけに追従する博物館経営論への注意が喚起された。

また一方で、博物館を実際運営する立場からの運営上の問題点も紹介され、これまでの資料を基準とする博物館の分類では分からず、博物館の経営手法の違いによる分類に基づく調査や理論構築が必要であるとの意見も提案された。

以上のことからも、日本の博物館の特殊な発展過程や運営形態および日本特有の学芸員の存在に根ざした議論や理論構築が必要なことがわかる。ミュージアム・マネージメントについての理論構築については、事業展開論や経営論に対する基礎論と位置づけ、さまざまな経営戦略に対する科学的根拠のある原理や公理として学会及び博物館関係者の共通な概念形成に役立つ理論構築を目指すべきであると思われた。

その後部会幹事の方々と検討し、以下のような理論構築としての構成案を作成してみた。今後学会員による活発な議論を期待したい。（部会長：高安礼士）

#### 理論構築研究部会の当面の研究テーマとその各論案

テーマ：[ミュージアム・マネージメントの  
パラダイム研究]（案）

##### I. 基礎論

1. 基本文献調査
  - ・諸外国、日本における博物館関連重要文献
2. 博物館経営手法の歴史
  - ・博物館運営計画の歴史的調査
3. 博物館運営の今日的課題
  - ・いま、何が問題か。日本の文化状況、企業博物館の使命、生涯学習社会

##### II. 各論

1. 博物館の社会的意味
  - ・博物館の役割
2. 博物館機能の構造
  - ・調査研究、展示、教育普及、資料保存、情報提供機能等の分類と構造
3. 経営論
  - ・財務財政論、人材育成、経営目標、経営評価
4. 組織論
  - ・運営目標と組織
5. 戰略論
  - ・経営手法、具体的行動プログラム

##### 6. 未来論

- ・博物館の未来、長期計画

##### III. 研究実施プログラム

1. 短期的実施計画
  - ・平成8年度事業計画
  - ・3か年計画
2. 長期的実施計画
  - ・理論構築部会10か年活動計画

#### 平成8年度 理論構築部会の予定

「ミュージアム文化研究部会」「制度問題研究部会」「事業戦略研究部会」「ソフトサービス研究部会」などで検討される実践報告やケーススタディーを理論的に整理していくことで、ミュージアム・マネージメント学の新しいパラダイムを提示することが本研究部会の役割である。この部会では、各部会の動向に対応しつつ継続的に理論構築をすすめていきたい。

そういう基本方向を確認しながらも、今年度はテーマ研究として、ミュージアム・アイデンティ、ミュージアムドメインの（ミュージアムは何のために存在するのか？時代の変動の中で何をしていくべきか？）という問題について検討をすすめていく。

フィールドミュージアム、チルドレンミュージアム、ユニバーシティーミュージアム、電子博物館などこれまでの枠組みではとらえられないミュージアム構想が各界で次々に提案されている。あらゆる価値観が変動にさらされている現在、ミュージアムをこれまでの枠組みでとらえることはできなくなってきた。

経営戦略を立案するうえで最も重要なことは存在領域を見直すこと（ドメイン）にあるといわれているが、その視点から「ミュージアムは何のために存在するのか」というという問い合わせを行っていきたくことは重かつ大である。

以上の問題意識から本研究部会では、現在提唱され、実践されている様々なミュージアム構想を見学を含めて調査しながら、それを理論的に整理することで「いまミュージアムに何が求められているか」提案することにしたい。  
(幹事：塚原正彦)

①研究会「新しいミュージアムパラダイムの検証」

9月28日（土）14：00～17：00

会場：国立科学博物館特別会議室

発表者：未定

②シンポジウム「ミュージアムの新しい動向と  
これからのマネージメント」

12月14日（土）10：30～ 会場：未定

事業戦略研究部会

事業戦略研究部会からの報告

生涯学習社会における博物館の機能や役割は、博物館の公益性、公共性、あるいは公教育性から、教育行政が取り組むべき課題、それも役所内では行政委員会（教育委員会）の職掌として認識され、議論されることが多かった。近年ではその議論も、博物館を社会教育施設という枠組みのなかで捉えることから、「公の施設」としてより広く一般市民に開放された機関・施設として位置づけ、行政が総合的、横断的な施策のもとで推進、展開していく性格のものに流れが変わりつつある。そこには、従来の行政の発想では補いきれない事業センスが求められ、実際面でも、民間の経営形態を導入した財団法人や第三セクターへの運営委託が一般化しつつある。いわゆる公設民営の動きである。

一方、我が国では純粋な民間による博物館の設置・運営の流れが、戦前から伝統的にあり、その活動は時代のニーズに対応できるまでに成熟してきている。

集客に対する取り組みをはじめ、設置理念の合目的性、さらに社会的あるいは社内的な評価の在り方、投資と効果の検証の仕組み等、当研究部会は、民間の、いわゆる「企業博物館」が指向する博物館の事業戦略を研究課題として取り上げ、地方公共団体が設置・運営する博物館の事業戦略づくりも視野にいれ、成熟した市民社会における博物館の事業戦略を体系化していく。

（部会長：高橋信裕）

7月6日「三菱みなとみらい技術館」で、見て聞いて  
策を考えよう。

博物館や美術館と「事業戦略」という言葉は、これまでのミュージアムの感覚からするとミスマッチで、おやっと首をかしげる方が多いかもしれません。けれども、そこがこの学会の打ってでるところの一つであ

ると当研究部会は誇りを持ってあたっています。

とはいっても、最初の会合であった3月の総会では、ほとんど自己紹介で終わってしまったため具体的な方向性について議論がなされていませんでした。そこで、5月13日の会議では、座長である高橋信裕さんと幹事、コアスタッフが全7名でざっくばらんに話し合いました。

「私どもが民間企業でいう事業は営利を目的にしたものであって、博物館でいうそれとは、言葉そのものに意味や捉え方の違いを感じますが」

「非営利事業となるわけです。ですけど集客がなくていいというわけでもなく、多ければいいというものでもない」

「私たちがこの研究部会に望むのは、やはり戦略の方であって、そうだとするならば、事例研究を主体にした活動がよいのではないかでしょうか」

このように話し合いは、それぞれが当研究部会に臨む意識を整理するなかで煮詰められ、事例研究主体の活動を開拓していくことを決まりました。

そこで第1回目の研究会は、コアスタッフでもある近藤茂夫さんが館長を務める「三菱みなとみらい技術館」を見学し、アンケートをもとにした入館者データの分析や経営についての考えをお聞きし、参加者全員で研鑽を深めようということになりました。

なお、当日は、都内だけでなく仙台から新幹線で佐藤琴さんが駆けつけるなどスタッフの強い意気込みがお察しできるかと思います。

ぜひ、ご参加ください！ （幹事：山下治子）

第1回例会 7月6日（土）PM3：00～

三菱みなとみらい技術館（受付に集合）

## ソフトサービス研究部会

### ソフトサービス研究部会からの報告

「ミュージアムがつくる新しい文化」をメインテーマに催された第1回大会の「ソフトサービス研究部会」では、主として「利用者の満足度の測定」という項目に、議論が集中した。初めての会合のため、自己紹介を兼ね学会への期待や要望もそれぞれに述べてもらった結果である。とはいえ、ミュージアム・ショップの運営の模索もあり、ボランティアのありかたは、どうあるべきかとの声も寄せられた。情報の提供という送り手発想の博物館の人々が、CS（顧客満足）という受け手発想への意欲を持っていることを強く感じられた。時代が大きく変化しているのだ。

満足度の測定より、むしろ「どのようにして満足させるべきか」が重要ではないかとの意見も述べられた。これは、事業戦略研究部会のマーケティングとも関連する。利用者の満足の創出と博物館の利益の創出は、マーケティングの主要目的であり、これを達成する事業戦略のひとつにソフトサービスがあると考えるからだ。

出席者の発言を聞いてみると、あたかも巨象一テレビの画面に映る虚像と同じである一をとらえて、その形を論じ、行動を期待しているように思われた。まさに、ミュージアム・マネジメントは、虚像である。だからこそ、ソフトサービスが成立するといえる。もし、これが実像であれば、それに見合ったハードで対応すればよい。巨象の脚をとらえ大きさ、重さ、脚力等を明確に論じ、必要なハードの提案で終わりとなる。

ソフトサービスは、量でなく質の問題である。それは、サービスを受ける側の評価がモノをいう。質には、ある時点において多くの要因が創りだしている一定の状態の表現を求められるから、量のような数字で説明できる議論は成立しない。学会である以上、ここところが重要なテーマのように思われる。質は直接見られないから表現する知恵である。

したがって、この研究部会では、無限の広がりを持つ虚像を漠然とでもよい、ある程度の予測を可能にするようなまとめりとして考え、説明できる法則性を見いだしたらどうかと考える。テレビ画面に納まっている

虚像で、日常話し合っていることを思いおこしてみると、そんなに難しいことではなかろう。それは、類型化して具体的な意味にしている。

構成する要因を探り出し、それらの関係を一括して全体に迫ることに努め、その上で、利用者満足の戦略はなにかを論じあうことはどうだろう。そのためにも、全員でミュージアム・マネジメントとはなにかを語ってもらいたいものである。あくまでも固定的な枠をはめるものではない。質は時代とともに変化していくから、漠然としているものの要因関係を考えることで、なにかが期待できる。このことは、理論構築研究部会で考慮されることであろう。しかし、学会全体で議論されてもよいのではないかと考える。

各研究部会でも、それぞれの立場からこの虚像について論じあって欲しい。その結果を持ち寄り学会全体の考え方、進むべき研究の方向や展望を、ある程度明確にできるだろう。ミュージアム・マネジメント学の発展に役立つ手法と考えてよい。

他方、理論構築研究部会で虚像に対する認識手法をとりまとめて、各部会に示し、各部会がその認識のもとに討論研究するのも筋のように思われる。しかし、この研究部会を博物館の実態に接しながら論じていくのも一方法と思う。実例を目前にして論ずることは、各論の応用例であり、この応用例から普遍的な法則性を見いだすことが、学会の研究態度でなかろうか。その意味で、研究大会2日目の事例研究は大変参考となつた。

いずれの場合も、意見は種々あるだろう。最終的には、構成する会員諸君の意思に従わなければならないだろう。ソフトサービスとは、本来、そのようなものであるからだ。

（座長：諸岡博熊）

### 今後の予定

利用者はミュージアムに何を求める、何に満足しているのでしょうか？そして、ミュージアムに関わる私たち、利用者の欲求にどう応え、どう満足を引き出せばよいのでしょうか。「利用者の笑顔と共に」を合言葉

として、ほんとうにミュージアムが社会のなかでキラキラと“息づく”ために、利用者とミュージアムをつなぐ架け橋=「ソフトサービス」のあり方を、皆さんと共に考えたいと思います。

アットホームで、本音の見える有意義な場を創りたいと思いますので、みなさん、奮って参加してください。

(幹事：重盛恭一)

#### 平成8年度 総合テーマ

「利用者の求めるもの、満足すること—ミュージアム・ソフト・サービスの研究—」（仮称）

第1回 小テーマ「事例研究；ソフト・サービスの現場を聞く（事例報告など）」（仮称）

\*清里高原にあるオルゴールをテーマとするミュージアム「ホール・オブ・ホールズ」の高見沢清隆氏をお招きして、同館でのサービスの奮戦模様を語っていただきます。

7月13日（土） P.M.15:00～17:30

場所：国立科学博物館/本館特別会議室

第2回 小テーマ「事例探訪；ソフト・サービスの現場を見る（見学会）」（仮称）

9月21日（土） 時間・場所未定

第3回 小テーマ「共同研究；ソフト・サービスと事業戦略（事業戦略研究部会と合同）」（仮称）

11月16日（土） 時間・場所未定

第4回 研究小テーマ「研究成果；ソフト・サービスのあり方を語り合う（研究整理）」（仮称）

2月15日（土） 時間・場所未定

#### 部会の開催予定一覧（再掲）

研究部会	日 時	テ ー マ	場 所	担 当
制度問題研究部会	6月29日(土) 13:00～15:00	生涯学習審議会社会教育分科会計画部会学芸員専門委員会においての報告ができるまでの検討状況	国立科学博物館	部会長：島津晴久 幹事：鷹野光行／小原 嶽
事業戦略研究部会	7月6日(土) 15:00～	三菱みなとみらい技術館で、見て聞いて策を考えよう	三菱みなとみらい技術館	部会長：高橋信裕 幹事：大木明／近藤茂夫／山下治子／斎藤恵理／佐藤琴
ミュージアム文化研究部会	7月7日(日) 14:00～17:00	地域文化の発信ほか	国立科学博物館	部会長：沖吉和祐 幹事：土井利彦
ソフトサービス研究部会	7月13日(土) 15:00～17:30	「事例研究；ソフトサービスの現場を聞く」 （「ホール・オブ・ホールズ」の高見沢清隆氏による事例報告）	国立科学博物館	部会長：諸岡博熊 幹事：重盛恭一／松丸敏和
理論構築研究部会	9月28日(土) 14:00～17:00	新しいミュージアムパラダ 検証	国立科学博物館	部会長：高安礼士 幹事：塚原正彦／守井典子／岡田純一

◆参加する場合は、下記の要領で、事務局にお申し込み下さい。

・申し込み期限：開催日の前々日

・方法：郵便又はFAXでお願いします。本会報の裏面の連絡票をコピーしてお使い下さい。

◆会場のご案内

国立科学博物館（JR上野駅下車、徒歩5分 TEL:03-5814-9894）

三菱みなとみらい技術館（桜木町駅下車、徒歩8分 TEL:045-224-9031）

## 事務局からのお知らせ

- (1) シンポジウム（ハンドブック出版記念） 平成8年9月ごろ近畿地区での開催を予定しております。
- (2) 研究紀要の発行 平成9年3月の大会に向けて発行を予定しています。本誌同様、ミュージアム・マネージメント学会にふさわしい名称を検討しています。こちらの方も皆様からアイディアを提供いただければ幸いです。なお、誌面の構成や原稿募集につきましては、次号に掲載することを予定しております。
- (3) 第2回大会 平成9年3月 日(土)、(日)に、国立オリンピック記念青少年総合センター、学習院大学、パルテノン多摩などでの開催を予定して準備をすすめているところでございます。詳細につきましては、次号で掲載します。
- (4) 会員募集 今年度も引き続き会員の募集を行っています。平成8年度に引き続き推薦者は必要としません。当学会を円滑に運営させるためには、できるだけ多くの人々に参加いただくことが大切です。できるだけひろい分野からの参加をお待ちしています。会員の皆様には、是非とも当学会を紹介いただきたいお願い申し上げます。
- (5) 原稿等の募集 本誌は会員の皆様がつくる会報です。ミュージアムに関する感想、関連学会の情報、投稿論文等を歓迎いたします。個性的かつ独創的な原稿を事務局までお寄せ下さい。
- 書評 ミュージアム・マネージメントを考える上で参考になると思われる図書・論文の紹介  
ジャンル不問。自著も可。1,000字以内
- 会員からのメッセージ 個人会員・学生会員：200字程度  
法人会員：600字程度
- 表紙デザイン、ロゴ 本誌の表紙、ロゴ、デザイン等ミュージアム・マネージメント学会にふさわしいものを公募します。皆様のアイデアを事務局までお寄せ下さい。
- その他、掲載したい原稿があれば、事務局までご相談ください。

## 編集後記

大会実施以来2ヶ月以上が経過しました。遅れましたが、ようやく本誌も発刊にこぎつけることができました。6月29日からの事業戦略研究部会の会合を皮切りに各研究部会が実施される予定です。学会の活動も軌道にのってきたようです。

当学会は、会員の皆様による会員の皆様のための会員の皆様の学会です。今後とも皆様から豊富なアイデアをお寄せいただき、誌面づくりに反映させていきたいと考えております。

次号はさらに充実した誌面をお届けするよう努力していくことを約束して筆をおかせていただきます。

(編集担当理事：堀山紀子)

JMMA会報 No.1 (vol.1 no.1) / 平成8年6月8日発行

事務局：国立科学博物館教育部企画課 (TEL) 03 5814 9876  
〒110 東京都台東区上野公園 7-20 (FAX) 03 5814 9898